

主体的・対話的で
深い学びを実現！

アクティブ・ラーニング 実践講座

中学2年生・英語

協同性を重視した活動で 生徒の気づきを促し、 発信力・傾聴力を育む

英語の授業では、4技能の総合的な育成のため、4技能を統合的に活用する言語活動中心の指導が求められている。その対応に向け今回は、英文で書いた「自分史エッセイ」を基に、最終的にペアで自然な対話ができるように指導することで、生徒の「発信力・傾聴力」を高めようとした授業を紹介する。その中でも特に、課題設定や活動の流れ、場づくりの工夫を取り上げる。

単元計画 中学2年生・英語「『自分史エッセイ』を英語で伝える」

ねらい 既習の英語表現を用いて「自分史エッセイ」の原稿を作成し、モデルの英語表現等を参考にして自然な対話になるよう工夫して話したり聞いたりできる。

育みたい資質・能力 コミュニケーション力（特に発信力、傾聴力）

時数	概要	学習内容・活動
1	Teacher's introduction	先生の「自分史」を英語で聞き、その内容に関する質問に答え、ペアでその内容について話す。
2	First Writing	自分のこれまでの歩みについて、質問に答える形で英文を書く。(第1稿)
3	Peer Editing	友だちの英文を読んで交流し、文を書き足すヒントを得る。
3	Second Writing	友だちや先生からのアドバイスを基に、より詳しく英文を書く。(第2稿)
4	Common Errors	Second Writing で見られた共通の間違いを参考にして、自身の英文を修正する。
5	Tips for speaking test	モデルの会話を見て、それを参考に、次の授業でのスピーキングテスト本番に向けた準備をする。
6	Speaking Test	自分のこれまでの歩みについて書いた英文を基に、先生やALTと3分間、英語で対話をする。

今回取り上げる授業 モデルの会話を見て、テスト本番に向けて準備をする

学習内容(時間配分の予定)	学習の主な目標	具体的な活動内容
1 導入 (17分)	発音練習やスピーチなどで、メインの活動への準備をする。	SMALL TALK *1、Bingo *2、「Show and Tell」 speech *3などを行う。
2 3 モデルの提示 (10分)	次時のスピーキングテストでの目標を明確化させる。	教員とALTによる、スピーキングテストのデモンストレーションビデオを見て、気づいた点を発表する。
個人練習 (5分)	ペアワークの前に自分で確認する。	前時までに書いた「自分史エッセイ」の原稿を見ながら、個人で対話の練習をする*4。
4 5 ペアワーク (16分)	ペアでスピーキングテストに向けた練習に取り組む。	相手を替えて3回*4、各回で目的を持たせて、対話の練習をする。各回の練習後に、相互に相づちやシャドーイング*5が何回できたかを確認し、コメントも書く。
6 まとめ (2分)	本時の振り返りをし、次時の学習事項を確認する。	振り返りシートに本時の取り組みの自己評価を書き込む。

* 輝翔館中等教育学校提供資料から抜粋し、編集部で作成。

*1 主に「聞く」「話す」の2技能の育成を目的に、単元の言語材料を基に、与えられた内容について、質問者と回答者を決めてペアで英会話をする活動。本時の授業では、誕生日や性格、好き嫌いなどが質問された。

*2 西里先生の授業では、生徒が単元に出てくる単語をビンゴカードのマスにあらかじめ書いておき、単語の発音練習をした後、ビンゴゲームをしている。

*3 大勢の前でテーマに沿って話す活動のこと。西里先生の授業では、ゴールデンウィークの課題として出された「自分が好きなもの」について全員が書いて提出した英文の内容を、先生が添削した上で、毎回1~2人の生徒が英語の授業の帯活動の時間にスピーチをしている。

*4 実際の授業では、時間の関係で、個人練習と、ペアワークの1回分を省略した。

*5 相手の発言を即座に復唱すること。



授業者

福岡県立
輝翔館中等教育学校

西里勇希 にしざと・ゆうき

教職歴4年。同校に赴任して4年目。2学年担任。教務担当。英語科。高校採用で、新採後2年間は高校段階を受け持ち、2016年度から中学校段階を担当。

実践校

福岡県立輝翔館中等教育学校

◎ 2004 (平成16) 年開校。県内唯一の県立の中等教育学校。2016年度から「福岡県立学校『新たな学びプロジェクト』」の研究開発校に指定され、ICT機器を活用した学力の充実に取り組んでいる。

校長 山田和弘先生

生徒数 623人 (6学年分)

学級数 18学級 (6学年分)

電話 0943-42-1917

URL <http://kishou.fku.ed.jp>

1 授業開始 (帯活動)

▶▶▶ 15分



授業の導入には、帯活動として、単元の言語材料を基にしたペアワークの SMALL TALK、単元に出てくる単語を用いた Bingo、生徒が自分の好きなものを紹介する「Show and Tell」speech (今回は釣りがテーマ) を行っている。speech では、生徒の話に出てきた重要表現を、先生が取り上げて解説。聞く側の生徒にはスピーチの姿勢や内容について、評価とコメントを書かせた。

2 モデルの提示

▶▶▶ 10分



本時のメイン活動は、次時のスピーキングテストに向けて繰り返し練習すること。目標は「自分の体験談や感想を交えながら、自然な対話ができるようになること」と先生が説明し、そのモデルとして、先生とALTによる対話の映像を流す。1回しか流さないこと、気づいた点を後で発表してもらうことを事前に伝えたところ、生徒は脇目も振らず集中して視聴していた。

主体性を引き出す工夫

生徒同士の学び合いで
生徒自身の気づきを促す

「新たな学びプロジェクト」の研究開発校2年目の福岡県立輝翔館中等教育学校は、ベネッセの「Classi」*6「ミライシード」*7などのICTを活用した主体的・協同的な学びをテーマに研究に取り組んでいる。

今回紹介する授業はその校内研究で行われた、西里勇希先生が独自に設定した発展的な単元の1コマで、既習の過去形や接続詞、未来形などを用いて、英語4技能を統合的に活用する言語活動を行うものだ。

「自分で実際に英語を使って練習を積み重ねないと、英語力は身につけません。そこで、教員が教え込むのではなく、まずは生徒が自ら話したくなる題材を設定して、4技能を統合した活動を行い、生徒にできるだけ多くの英語を使わせるような授業を心がけています」(西里先生)

西里先生が今回の授業で工夫したのは、生徒が大切な点に自ら気づき、

修正しながら、段階的に学習を積み上げていくことだ。授業の到達目標を「相手と自然な対話ができること」とし、そのために「自分の体験談や感想を交えて話す」「原稿を見ないで相づちやシャドーイングを入れる」を行動目標として設定した。

「今回のテーマは『対話』なので、話し手だけでなく、聞く側の姿勢にも注意を促しました」(西里先生)

そして、生徒に自然な対話のポイントに気づかせるため、ALTと先生が対話をしている映像を視聴させ、自然な対話になっている理由をワークシートに書かせて、発表させた。

さらに、今回はペアワークを3回行うこととし、到達目標の達成に向けて3つのスモールステップを設定。ワーク前にはその都度、先生が小目標を説明して生徒に意識させ、ワーク後は振り返りシートに達成度合を自己評価させ、さらに相手に対する気づきのコメントも書かせた。こうすることで、1回目より2回目の方が、生徒の活動も活発化していた。

「気づきを反映させながら段階的に

練習させることで、相手と自然な対話ができるようになってくるとともに、最後の時間に行うスピーキングテストに向けて自信をつけてほしいと考えました」(西里先生)

また、対話の準備として、前時まで3コマかけて、「自分史エッセイ」を80語以上の英文で書いた際にも、生徒同士で互いの英文のエッセイを読み合っ、文法や単語の間違いを指摘し合う活動を行った。

「生徒同士の学び合いは、英語が苦手な生徒の学びになるのはもちろん、得意な生徒にとっても他者に教えることで学びがあります。生徒が自ら気づき、学んでいけるよう、生徒同士の添削後も、私がそれをチェックするのではなく、多かった間違いを集約して次の授業で提示することで、再度、生徒の気づきを促しました」(西里先生)

対話の場づくりへの配慮

ペアを毎回替えて
誰とでも話せる力を育む

授業では、生徒の発信力・傾聴力

*6 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。
*7 「ムーブノート」「話し合いトレーニング」「ドリルパーク」の3つのアプリケーションで構成された、ベネッセのタブレット学習プラットフォーム。

3 到達目標の確認

▶▶▶8分



生徒は視聴した映像の会話の内容をワークシートに書き、指名された生徒が発表して聞き取れたかを確認。さらに、自然な対話になっていた理由を問いかけると、生徒から「具体的に話していた」「相づちを打っていた」などが挙がった。それを受けて先生は、「体験談を入れる」「相づちは3回以上、シャドーイングは1回以上」と具体的な目標を提示し、生徒に改めて意識させた。

4 ペアワーク①

▶▶▶8分



前時までに書いた「自分史エッセイ」を基にペアワークを行う。1回目には気をつけるのは「制限時間の3分間」と「相づちやシャドーイングを使うこと」。質問側は質問カードを見ながら“When were you born?” “What do you like now?”などと尋ね、回答側は原稿を見つつ答える。ワーク後は振り返りとして、相づちやシャドーイングの回数と、相手へのコメントを書いて渡した。

を育むため、ペアワークを多用し、生徒同士の助け合いを重視している。しかも、授業ごとに席替えをし、ペアワークの相手が毎回替わるようにしている。1年次は生徒の人間関係を考慮して先生が席順を決めていたが、2年次ではランダムにした。その理由を、西里先生はこう説明する。

「生徒が将来英語を使う際には、初対面の人と話すことも多いと思います。誰とも友好的なコミュニケーションができるよう、授業ではあえていろいろな生徒と組ませています」

この方法は、クラス内の人間関係が良好でなければうまくいかない可能性もあるが、互いが伸びるために

サポートし合うことの意義やメリットを生徒に伝え続けながら、あえて行っている。同校の校内研究のアドバイザーを務める久留米大学の安永悟教授は次のように語る。

「このクラスでは互恵的な活動ができていて、西里先生の指導によって協同学習が生徒に浸透している様子が見えましたが良かったです。ただし、できていない生徒もできているように見えることもあるので、活動の様子を丁寧に見取る必要があります」

ペアワークの机間巡視では、西里先生は注意が必要そうなペアを中心に見て回る。また、生徒が相手の発言を聞き流していないか確認するため、

「どんな内容を話していた？」と聞き手に投げかけるなどして、意味のある活動になるよう支援している。

また、活動中の生徒の目線までしゃがみ込んで、寄り添う姿も見られた。

「教員がそばに立って見下ろしていると、生徒は威圧的に感じ、英語が苦手な生徒は萎縮してしまいます。生徒が少しでもリラックスできるよう、なるべく生徒と同じ目線で話すようにしています」(西里先生)

活動時以外にも、西里先生は協同学習に向けた場づくりのため、生徒全員が活躍できる場面をなるべく作るようにしている。授業の導入で行う「Show and Tell」speechもその1つだ。また、担任のクラスでは、帰りの会で、部活動の大会に出場する生徒に意気込みを発表させて、全員で応援するなど、生徒が自分のことを話す場面を意識的に設けている。

「協同学習では、生徒が自己肯定感を持ち、さらに互いを認め合っていることが大切です。普段の学級づくりから、生徒が活躍できる場面を増やしています」(西里先生)



写真1 ペアワークでは毎回組み合わせを替えるため、あいさつを重視。席を移動後、“Hello!”とあいさつしてから活動し、終わるとハイタッチをしてお礼を言ってから、次の席に移動する。



写真2 黒板には「今日のめあて」など最後まで残しておきたいことを書き、電子黒板には活動のルールなど、その場限りのことを映すというように、使い分けている。

5 ペアワーク②

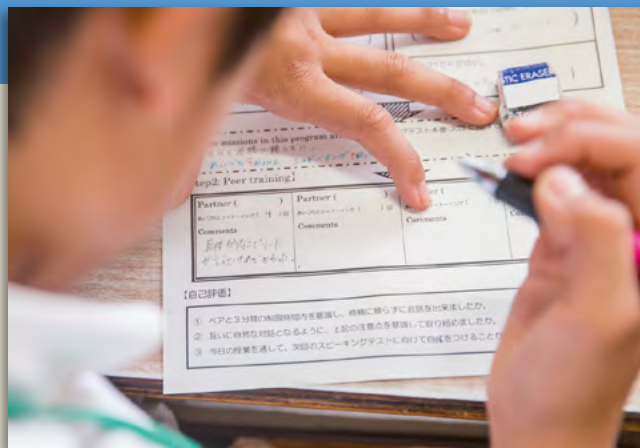
▶▶▶7分



2回目は、「相手の話を理解した上で相づちやシャドーイングをすること」を意識するよう伝える。さらに、1回目のワークで先生が気づいたこととして、人の話を聞く時に腕組みや肘つきをすると、否定的な態度に見えることを説明した。その後、相手を替えて2回目スタート。1回目よりも全体的に声が大きく、相手の目を見て、原稿を見ずに話そうとする姿があちこちで見られた。

6 本時の振り返り

▶▶▶2分



2回目のワークが終わると、再度振り返りシートに相づち・シャドーイングの回数と、相手へのコメントを書いて、相手に渡した。そして、授業全体の振り返りとして、3つの項目(本文「授業を終えて」を参照)について3段階で自己評価をし、先生に提出した。最後に、先生が、次のテストに向けて練習するためのペアを発表し、ペアで協力して準備をしておくように伝えた。

授業を終えて

主体的に学ぶきっかけづくりをしていきたい

授業の最後には毎回、本時の目標到達度について3段階で自己評価をさせている。今回は、①制限時間の3分間を意識して、原稿に頼らずに会話ができたか、②自然な対話となるよう注意点に気がつけたか、③テストに向けて自信がついたかだ。「できなかった」をつけた生徒は②③ではゼロだったが、①は8人いた。

「生徒の意欲は高かったのですが、3回練習する予定が2回しかできなかったこともあり、原稿を見ずに話すことには不安が残るという結果でした。今後の課題です」(西里先生)

授業の事後協議会では、「深い学びとは何か」が話題となった。そこで参加者から出てきた意見を踏まえて、西里先生は次のように語る。

「今回の授業では『主体的』『対話的』の観点ではうまくできたと思いますが、『深い学び』については私自身、課題意識がありました。『深い学

びとは?』を日頃から考えていましたが、今日の協議会で、『もっと学びたい』という意欲が高まるなど、生徒の学ぶ姿勢に変化が見られることが、深い学びの表れなのだと気づきました。授業だけで英語力を育てる

ことには限界があります。国内外の人とコミュニケーションできる人材を育むという目標に向けて、授業では、英語力の土台づくりとともに、卒業後も主体的に学べる人となるきっかけづくりをしていきたいと思います」

アドバイザーが語る実践のポイント

最初にゴールイメージを持たせることが大切

西里先生は発問の仕方が上手で、授業のテンポがよく、活気もあります。特によかったのは、誰とペアになってもスッと活動に入り、互いが伸びるためにサポートし合うという、協同の精神が生徒に浸透していたことです。前回授業を見た時よりも生徒が育っていると感じました。

改善点としては、今回のモデル映像を単元の最初の授業で見せるとよいでしょう。「アクティブ・ラーナー」を育むという大きな目標を考えると、生徒には、初めに単元のゴールを見せて見通しを持たせ、活動の目的を常に意識させることが大切です。また、この後行われるスピーキングテストを撮影し、うまくできた生徒の映像を次年度にモデルとして最初に提示する方法も考えられます。先輩の実例を見れば、生徒はより具体的にゴールをイメージできるはずで

す。西里先生が、さらに指導力を高めるためのステップとしては、まず育てたい人材像を明確にし、そのために今何をすべきかを考えて授業に落とし込むことが大切になります。アクティブ・ラーニングも英語4技能統合も、授業の手法の1つに過ぎません。大きな目標を見据えながら、日々の授業をしっかりと進める。この両方があるこそ、生徒は大きく成長していくのです。



久留米大学文学部教授

安永 悟

やすなが・さとる

九州大学助手等を経て現職。専門は、教育心理学、協同教育。著書に『活動性を高める授業づくり』(医学書院)など。